わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

161

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

月の妖力（ようりょく）

もっとも身近で、もっとも神秘的な存在のひとつに「月」がある。

日本で最古の小説である「かぐや姫」の見せどころは、かぐやが最後に月に帰っていくという摩訶不思議さにある。ここでも、月はこの世のものではない何物かの象徴として描かれている。

別名「竹取物語」と呼ばれるこの物語の作者は不明のまま。しかし、かぐやに求婚する5人の男性が皆実在の人物であり時代背景が詳細に描かれているところや、頑として帝の寵愛を退けてしまうあたりから、当時反体制側にいた貴族の誰かの手によるものだと言われている。だいたい、竹の中から10cm未満の姿で生まれてくるなんて、同じ女子からみればあまりにずるい。しかもみるみるうちに輝くばかりに美しい姫に成長するとは、昔、クラスにひとりはいたおいしいところを皆持っていってしまうアイドル級の女の子そのもの。作者は女性ではなく男性だといわれるのも納得である。

月、とりわけ満月の妖しさは、時代や国が違っても変わらない。

満月の夜に変身するもの―。そう問われて真っ先に思い浮かぶのは「狼男」だろう。こちらは、1941年にアメリカで制作されたホラー映画である。実はこの映画、本邦未公開だったが、戦後テレビドラマとして日本でも放送され、ドラキュラやフランケンシュタインなどとともにホラーキャラクターとして人気を博した。

ヨーロッパやアフリカでは、古代から狼男の伝説が息づいていた。国によっては忌むべき呪われた存在だが、モンゴルやトルコなどでは、狼に変身する獣人化現象はむしろ高貴な血統の証として尊ばれる傾向にあった。ただし、人間が狼になるのは満月の夜と決まっているわけではなかった。満月というシチュエーションが演出の上で効果的だったのは、やはりハリウッド映画においてだろう。視覚を刺激する映像の力はすごい。今や満月に向かって咆哮する狼の姿は、目に焼き付いて離れないのだから。

「月の魔力」の著者、A・L・リーバーは、満月の夜に殺人事件が増えることを証明した。リーバーは精神科医だが心理学者であるジョディ・タッソーらも、自動車泥棒、家庭内暴力、強盗や強姦などがすべて満月時に増加するという論文を発表している。

普遍的に伝えられる月との関係で、身近な話題は「満潮時は出産が多く、干潮の時は死亡者が増える」というものである。私も、病院勤務のときには両者を意識した。そう先輩に教えられていたからだ。自分の勤務時間と満潮・干潮時間を照らし合わせることで、仕事の忙しさを予測していたというわけだ。

リーバー博士の主張にはもちろん反論もある。潮の満ち引きが月の引力に左右されることは証明されているが、人の生死には無関係という意見も多い。

私ごとで恐縮だが、1月に母が逝った。不謹慎ながらすぐに潮の干潮時間を調べたところ、まさにドンピシャの時間だった。その前後、瞬く間に火葬場の予約が埋まったとも聞いた。

月の力、恐るべし。私にとって、母の死んだ日は自然の畏れをひしひしと感じた日でもあったのだ。

イラスト・伊藤栄章